

「柳河風俗詩」～「かきつばた」～

白秋は柳河の中でも、旧士族の住んでいる中心ではなく、漁師町に住んでいた。
六騎（ろっきゅ）と呼ばれる地域で、昔、平家の落人が6名、落ち延びてきて漁師になったと言われる。
中心から外れた地域であり、中心街とは違い、開放的雰囲気であった。

水郷

「かきつばた」

柳河の
古きながれのかきつばた、
晝は ONGO の手にかをり、
夜は菱（し）を れて
三味線の
細い吐息（といき）にわれ泣きあかす。
（鴉（ケエツグリ）のあたまに火が點（つ）いた、
潜（す）んだと思ふたらちよいと消えた。）



白秋の生家



白秋の通学路



<参考>

「ONGO」 良家の娘、柳河語

まずタイトルの「かきつばた」であるが、柳河の水郷に咲く花で、柳河の象徴のひとつであろう。

日本ではよく「いずれが菖蒲（あやめ）か杜若（かきつばた）。」と言われる。

いずれも美しさで違いはなく、どちらも引けをとらないという意味で使われている。

では「あやめ」と「かきつばた」はどう違うのだろうか？

花びらの付け根の部分が 白なのが「かきつばた」、編み目のような模様なのが「あやめ」だという。

また花言葉は「幸福は必ず来る」で、沖縄を除く日本全国に生息している。



次に「鴛（ケエツグリ）」であるが、これは一曲目の「柳河」に出てくる「鴛（ニオ）」と同じ鳥で、これも柳河の象徴のひとつである。

この鳥の呼び方は全国様々で、「鴛（ケエツグリ）」は柳河の方言であり、正式には「かいつぶり」と言う。

「にお」の他「にほ」「かいつぶり」「にほとり」「むくり」「むぐり」「いよめ」などと呼ばれているようだ。

都心を含めて全国に生息していて、特に琵琶湖には多く、「鴛の海」と呼ばれているとのこと。

頬からあごにかけての部分に赤褐色で、潜水が得意な鳥だ。



以上のキーワードをもとに、詩の意味を考えてみる。

白秋は、水郷のながれに咲く「かきつばた」を、柳河に住む美しい「ONGO」とだぶらせているようだ。

昼間、「ONGO」にだかれた「かきつばた」は「ONGO」の手に美しいかおりをたたえている。

しかし、夜になると美しかった「かきつばた」もしおれて、「ONGO」とともに、泣き明かすしかない。

そのバックには、三味線の吐息のような音色が流れている。

古く廃れてゆく町、柳河の表面の美しさと、裏のせつなさを、「かきつばた」に例えて、白秋は歌っている。

「(鴉(ケエツグリ)のあたまに火が點(つ)いた、潜(す)んだと思ふたらちよいと消えた。)」という一節は柳河の童謡から用いた、という話もある。

ただ、白秋は、廃市柳河の象徴として、これらのキーワードを使ったと思われる。

「赤い」明るさも、水に潜ってしまえば、すぐ消えてしまう。

「ONGO」の美しさも、夜になれば、しおれてしまう。そういった、柳河の廃れていく象徴として、これらの言葉を使ったのではないか。

白秋の描く柳河の世界、彼自身が「静かな廃市」また「水に浮かぶ棺」と表現したその世界。

(注) 柳河は明治になって汽車路線からはずれ、昔の柳河藩時代の賑わいをなくしつつあった。
多田武彦氏の曲も、この詩にマッチした、日本情緒に満ちた合唱曲として作られている。



思ひ出 (初版)
明治 44 年(1911)刊行



主な作品：

「邪宗門」 第一詩集 北原白秋

「思ひ出」 第二詩集 北原白秋

「東京景物語」 第三詩集 北原白秋

「この道」 北原白秋／山田耕筈

「あわて床屋」 北原白秋／山田耕筈

「かえろかえろと」 北原白秋／山田耕筈

「雨ふり」 北原白秋／中山晋平

「砂山」 北原白秋／中山晋平

「雨」 北原白秋／弘田龍太郎

「ゆりかごの唄」 北原白秋／草川 信

「柳河風俗詩」～「梅雨の晴れ間」～

終曲「梅雨の晴れ間」の詩には、「思ひ出」の数々のキーワードがちりばめられているが、強烈な白秋の「思ひ出」は感じられない。

柳河では毎年、春になると旅の一座が、田舎芝居の公演を開いていた。

「野の隅には粗末な蓆(むしろ)張りの圓天井が造られる。その芝居小屋のかげをゆく馬車の喇叭のなつかしさよ。」

場所や演目を変えながら、数日間の柳河での公演、これを子どもたちは愉しみにしていたらしい。

もちろん、白秋もその一人で、「紺屋のおろく」の初恋もその芝居の真似をしていた時の話だ。

「まだ夏には早い五月の水路には杉の葉の飾りを取り付け始めた大きな三神丸の一部をふと学校がへりに発見した沖ノ端の子供の喜びは何に譬えよう。」

場所は水郷の周りの田畑、そして船が舞台になることもあった。

「昔ながらの廃れかけた舟舞台には桜の造花を隈なくかざし、欄干の三方に垂らした御簾は彩色も褪せはてたものではあるが…、

町を替ゆるたびに幕を替え、日を替ゆるたびに歌舞伎の藝題もとりかえ、同じ水路を上下すること三日三夜、見物は皆あちらこちらの溝梁から小船を棹さして集まり…」

後に続く幾多の組曲の終曲を飾る多田節の数々、その原点がこの曲にある。ともあれ具体的に詩をみてみたい。

「梅雨の晴れ間」

まはせ、まはせ、水ぐるま、

けふの午(ひる)から忠信(ただのぶ)が隈(くま)どり紅(あか)いしやつ面(つら)に

足どりかろく、手もかろく

狐六法(きつねろつぽふ)踏みゆかむ花道の下、水ぐるま……………

まはせ、まはせ、水ぐるま、

雨に濡れたる古むしろ、圓天井のその屋根に、

青い空透き、日の光、

七寶(しつぼう)のごときらきらと、化粧部屋(けしやうべや)にも笑ふなり。



まはせ、まはせ、水ぐるま、

※1 梅雨（つゆ）の晴れ間（ま）の一日（いちにち）を、せめて楽しく浮かれよと

※2 まはり舞臺も滑（すべ）るなり、

※3 水を汲み出せ、そのしたの葱の畑（はたけ）のたまり水。

まはせ、またせ、水ぐるま、

だんだら幕の黒と赤、すこしかかけてなつかしく

※4 旅の女形（おやま）もさし覗く、

※5 水を汲み出せ、平土間（ひらどま）の、田舎芝居の葦畑（にらばたけ）。

まはせ、まはせ、水ぐるま、

はやも午（ひる）から忠信（ただのぶ）が紅隈（べにくま）とったしやつ面（つら）に

足どりかろく、手もかろく、

狐六法（きつねろつぽふ）踏みゆかむ花道の下、水ぐるま……………



歌舞伎に関連する言葉が多く、それらの意味から、この詩を理解してみよう。

まず「忠信」「狐六法」、これらは「義経千本桜」という有名な歌舞伎の役柄と演技だ。この歌舞伎のストーリーは以下のとおり。

「義経千本桜」ストーリー <こちらでナレーション付きのあらすじ／人物相関図などが楽しめます。<http://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/exp3/index.jsp>>

義経は朝廷からいただいた名鼓「初音」を静御前に渡して、伏見の鳥居の前で別れる。

その静を義経を狙う逸見藤太が見つけ、頼朝の所へ連れて行こうとするが、佐藤忠信（実は狐忠信）が現れて、静の危機を救う。

戻ってきた義経は忠信を誉めて、愛用の鎧を与えて静を託す。

河連法眼の館にいた義経の所へ佐藤忠信（本物）がくる。

忠信が静を連れてないので、義経は問い詰める。しかし忠信には何のことか分からない。

そこへ静が忠信（狐）と一緒にくる。

静を守って旅をしていたのが狐であることが分かる。狐は「初音」は自分の親の皮で作られており、それでそばに居たくてやってきたという。

狐を憐れんだ義経は源九郎狐の名と初音の鼓を与えると、狐は鼓を抱えて空を飛んで去って行く。

詩に出てくる忠信は本物の忠信ではなく狐が化けた狐忠信である。

「六法（六方とも書く）」とは、歌舞伎で手と足を大きく振るのを基本にして、歩く姿・歩く仕草・歩く風俗を誇張して見せるものだそうだ。ただし、役者が舞台中央で歩く場合には、「六法」とは言わず、役者が花道から揚幕（花道の出入り口）に向かって引っ込むときに見せる歩き方を特に「六法」というのだそうである。

そして「六法」を演じることを「六法を踏む」と言う。

では語源は何か？

諸説があるようだが、歩くときに「天地東西南北」の6方向に手を動かすからだという説が有力のようである。

さらに「六法」にも色々な種類があり、有名なものが弁慶の「飛び六法」で、

「勧進帳」の最後を飾る豪快なものだという。

そして、もうひとつが話題の「義経千本桜」の「狐六法」なのだそうだ。

その他の用語を解説する。

「隈どり」

隈どりとは顔に描かれた様々な色・模様の線のことで、色によって紅隈・藍隈・茶隈に大別できる。

「だんだら幕」

「段だら」とは、段がいくつもあることで、ここでは黒と赤で交互に染められた幕のこと。

「平土間」

歌舞伎劇場で、舞台の正面の低い枡形にくぎった見物席。

「まはり舞台」（廻り舞台）

歌舞伎の丸く切り抜いて廻すことのできる舞台。

場面の転換が容易にでき、江戸時代には、奈落で人が廻していた。

「紅隈」

荒事に用いられる隈どりの代表で、紅という色が若さやエネルギーを象徴している。



以上を前提知識として、詩を見直してみたい。

この詩で白秋は自分の懐かしさだけでなく、梅雨の晴れ間に客席の雨水を処理して何とか芝居公演を成功させようとしている田舎芝居の一座を、暖かく見守っている。テレビも映画さえ無かった当時の柳河で、娯楽といえばこういった巡業の芝居一座だったのだろう。

それは子供たちだけでなく大人も一緒だったはずだ。町をあげて歓迎した田舎歌舞伎の一座。

過ぎ去った風景。本来、平土間であるべき葦畑が梅雨の雨水でどうしようもない。

やむなく主役のひとりである狐忠信を演ずる役者が、一生懸命、雨水を水車を使って、汲み出している風景だろう。

最初は化粧の赤い隈どりをつけていた役者も最後は、汗のためかその紅隈がとれてしまう。

梅雨の晴れ間に、狐六法を水車というまわり舞台、いや花道で踏む狐忠信、その姿のバックに走る馬車と御者の吹く喇叭。

まさに白秋ワールドだ。

古い蓆の芝居小屋に降り注ぐ太陽の輝き、それは廃れてゆく柳河のひと時の輝きなのだろう。

また水を汲み出すための水車を廻り舞台に例えたり、水車を回す役者の足取りを狐六法に例えたり、このあたりは白秋の独壇場だ。

ただ、この芝居一座の去った後の柳河は、祭りの後の寂しさが漂うと白秋は記載している。

廃れてゆく柳河のひと時の賑わいなのだ。

古蓆も、隙間からの太陽の光で七宝のようにきらきら輝く道具に仕立てている。

旅の女形、だんだら幕、白秋の思い出のキーワードが満載されている。

そういう意味でこの詩は、白秋の強烈な思い、感情というより、そのバックを飾る風景かもしれない。

この詩に対して多田武彦は、組曲の終曲という、ある意味で音楽的な主役の座を与えている。

この曲だけで単独で演奏した場合、多田節に酔い、勢いだけ歌う底の浅い演奏になる可能性があると思う。

特に「かきつばた」で白秋の柳河の世界を創った後、演奏されるべき曲と考える次第である。



舞台の下手にある通路が、花道です。花道は舞台の場面によってさまざまな場所に変化します。屋外の場面では道になります。舞台とは違う場面を演じる場所として、非常に重要な役割をもっています。歌舞伎では、花道を通して出たり引っ込んだりする場面は、演技の大きな見せ場となります。引っ込む時の演技で代表的なものが、六方です。舞台より客席に近い花道を使った演技は歌舞伎独特のもので、観客に強い印象を与えることができます。

白秋の生涯

柳川時代（明治 18 年～明治 37 年）

“油屋のトンカジョン（大きな坊ちゃん）”と呼ばれていた少年時代。よく母方の叔父や出入りの商人から内外の物語や珍しい話を聞き、幼き夢は後に文学の憧憬につながりました。中学伝習館に入学してからは、友人と回覧雑誌『蓬文』などを発行。“白秋”と号しました。こうした中で、家の火災や親友の自殺、さらには一教師との争いで卒業直前に退学するなど、傷心のうちに上京しました。

青春時代（明治 37 年～明治 45 年）

明治 37 年に上京した白秋は、早稲田大学英文科予科に入学して学業の傍ら詩作に励みました。翌年には『早稲田学報』の懸賞に応じ、長編詩『全都覚醒の賦』が一等に入選。明治 39 年には与謝野寛の招きで新詩社に参加。機関紙『明星』で活躍し、先輩上田敏らに将来を期待されました。明治 40 年、西九州の南蛮遺跡の探訪旅行で名作『邪宗門』を生み出し、さらに 2 年後、詩集『思ひ出』を発刊。名実ともに詩壇の第一人者となりました。

遍歴の時代（大正元年～大正 9 年）

白秋は恋愛事件で一時憂悶の時を過ごしましたが、大正 2 年の春に結婚。神奈川県の大磯で新生活を始めました。『城ヶ島の雨』はこの頃の作品です。しかし、妻俊子とは 1 年余りで離婚。大正 5 年には江口章子と再婚し、東京都南葛飾に移転。その後も各地を転々と移り住みました。この頃の生活は窮乏のどん底で、白秋の詩境も沈潜。大正 8 年、小田原に「木兎の家」と呼ぶ茅葺きの家を建てた頃から窮乏生活から脱しましたが、妻章子とも離婚するという不幸にあいました。

壮年の時代（大正 10 年～昭和 9 年）

白秋は大正 10 年に佐藤菊子と結婚し、翌年長男隆太郎が誕生。大正 14 年に長女篁子も生まれ、家庭的安息を得て、遠ざかっていた歌作にもかえりました。大正 15 年小田原から東京に戻り、安定した活発な文筆活動を続けました。昭和 3 年、大阪の朝日新聞社の依頼で日本初の芸術飛行に参加して、20 年ぶりに郷土柳川を訪問し、熱烈な歓迎を受けました。その他にも、官庁や会社の招きで各地を巡遊し、多彩な文筆活動をしました。

豊熟の時代（昭和 10 年～昭和 17 年）

昭和 10 年に白秋は、新幽玄・新象徴を理念に「多磨短歌会」を結成し、歌誌『多磨』を創刊しました。歌壇を二分する新勢力となりましたが、過労のため発病。視力が衰え、薄明の世界へ入りました。しかし文筆の意欲は衰えず、昭和 14 年に紀元 2600 年記念交声曲詩『海道東征』と長唄『元寇』を完成し、その後、福岡日日新聞社から文化賞が授与されました。さらに芸術会会員にも推されましたが、惜しくも昭和 17 年 11 月 2 日、57 歳で永眠しました。

水郷柳河 北原白秋

私の郷里柳河（やながは）は水郷である。さうして静かな廃市の一つである。自然の風物は如何にも南国的であるが、既に柳河の街を貫通する数知れぬ溝渠（ほりわり）のほひには日に日に廃れてゆく旧い封建時代の白壁が今なほ懐かしい影を映す。肥後路より、或は久留米路より、或は佐賀より筑後川の流を越えて、わが街に入り来る旅びとはその周囲の大平野に分岐して、遠く近く瓏銀の光を放つてゐる幾多の人工的河水を眼にするであらう。さうして歩むにつれて、その水面の随所に、菱の葉、蓮、真菰、河骨、或は赤褐黄緑その他様々の浮藻の強烈な更紗模様のなかに微かに淡紫のウオタアヒヤシンスの花を見出すであらう。水は清らかに流れて廃市に入り、廃れはてた Noskai（ノスカイ）屋（遊女屋）の人もなき厨の下を流れ、洗濯女の白い洒布に注ぎ、水門に堰かれては、三味線の音の緩む屋すぎを小料理屋の黒いダアリヤの花に歎き、酒造る水となり、汲水場（くみづ）に立つ湯上りの素肌しなやかな肺病娘の唇を嗽ぎ、気の弱い鶯の毛に擾され、そうして夜は観音講のなつかしい提灯の灯をちらつかせながら、樋（ぬび）を隔てて海近き沖（おき）ノ端（はた）の鹹川（しほかは）に落ちてゆく。静かな幾多の溝渠はかうして昔のまま白壁に寂しく光り、たまたま芝居見の水路となり、蛇を奔らせ、変化多き少年の秘密を育む。水郷柳河はさながら水に浮いた灰色の柩である。

折々の季節につれて四辺の風物も改まる。短い冬の間にも見る影もなく汚れ果てた田や畑に、苧株のみが鋤きかへされたまま色もなく乾き尽くし、羽に白い斑紋を持った怪しげな高麗烏（かうげがらす）（この地方特殊の鳥）のみが廃れた寺院の屋根に鳴き叫ぶ、さうして青い股引をつけた櫛（はじ）の実採りの男が静かに暮れてゆく卵いろの梢を眺めては無言に手を動かしてゐる外には、展望の曠い平野丈に何らの見るべき変化もなく、凡てが陰鬱な光に被はれる。柳河の街の子供はかういう時幽かなシュブタ（方言鮑（はえ）の一種）の腹の閃きにも話にきく生胆取（いきぎもと）の青い眼つきを思ひ出し、海辺の黒猫はほゞけ果てた白い穂の限りもなく戦いてゐる枯葦原の中に、ちつと蹲つたまゝ、過ぎゆく冬の囁きに昼もなほ耳かたむけて死ぬるであらう。

いづれにもまして春の季節の長いといふ事はまた此地方を限りなく悲しいものに思はせる。麦がのび、見わたす限りの平野に黄ろい菜の花の毛氈が柔かな軟風に乗り初めるころ、まだ見ぬ幸を求むるためにうらわかい町の娘の一群は笈に身を褰し、哀れな巡礼の姿となつて、初めて西国三十三番の札所を旅して歩く。（巡礼に出る習慣は別に宗教上の深い信仰からでもなく、単にお嫁入りの資格としてどんな良家の娘にも必要であつた。）その留守の間にも水車は長閑かに廻り、町端れの飾屋の爺は大きな鼈甲縁の眼鏡をかけて、怪しい金象眼の愁にチンタンと鎚を鳴らし、片思の薄葉鉄（ブリキ）職人はぢりぢりと赤い封蠟を溶かし、黄色い支那服の商人は生温い挨拶の言葉をかけて戸毎を覗き初める。春も半ばとなつて菜の花もちりかかるところには街道のところどころに木蠟を平準（なら）して干す畑が蒼白く光り、さうして狐憑（きつねつき）の女が他愛もなく狂ひ出し、野の隅には粗末な蓆張りの円天井が作られる。その芝居小屋のかげをゆく馬車の喇叭のなつかしさよ。

さはいへ大麦の花が咲き、からしの花も実となる晩春の名残惜しさは、青くさい芥子の萼（うてな）や新しい蚕豆（そらまめ）の香ひにいつしかとまたまぎれてゆく。

まだ夏には早五月の水路に札の葉を飾りを取りつけ初めた大きな三神丸（さんじんまる）の一部をふと学校がへりに発見した沖の端の子供の喜びは何に譬へやう。櫛の方の化粧部屋は蓆で張られ、昔ながらの廃れかけた舟舞台には桜の造花を隈なくかざし、欄干の三方に垂らした御簾は彩色も褪せはてたものではあるが、水天宮の祭日ともなれば粋な町内の若い衆が紺の半被（はつぴ）に棹さゝれて、幕あひには笛や太鼓や三味線の囃子面白く、町を替ゆるたびに幕を替へ、日を替ゆるたびに歌舞伎

の芸題もと替へて、同じ水路を上下すること三日三夜、見物は皆あちらこちらの溝渠から小舟に棹さして集まり、華やかに水郷の歓を尽くして別れるものの、何処かに頹廢の趣が見えて祭の済んだあとから夏の哀れは日に日に深くなる。

この騒ぎが静まれば柳河にはまたゆかしい螢の時季が来る。

あの眼の光るのは

星か、螢か、鶉の鳥か

螢ならばお手にとろ、

お星様なら拝ませう。

穉（をさな）い時私はよくかういふ子守唄をきかされた。さうして恐ろしい夜の闇におびえながら、乳母の背中から手を出して例の首の赤い螢を握りしめた時私はどんなに好奇の心に顫へたであらう。実際螢は地方の名物である。馬鈴薯の花さくころ、街の小舟はまた幾つとなく矢部川の流を溯り初める。さうして甘酸ゆい燐光の息するたびに、あをあをと眼に沁みる螢籠に美しい仮寝の夢を時たまに閃めかしながら、水のまにまに夜をこめて流れ下るのを習慣とするのである。

長い霖雨の間に果実（くだもの）の樹は孕み女のやうに重くしなだれ、ものの卵はねばねばと渚水（たまりみづ）のむじな藻にからみつき、蛇は木にのぼり、真菰は繁りに繁る。柳河の夏はかうして凡ての心を重く暗く腐らしたあと、池の辺には鬼百合の赤い閃めきを先だてゝ、（や）くが如き暑熱を注ぎかける。

日光の直射を恐れて羽蟻は飛びめぐり、溝渠には水涸れて悪臭を放ち、病犬は朝鮮薊（あざみ）の紫の刺に後退りつつ吼え廻り、蛙は蒼白い腹を仰向けて死に、泥臭い鮎のあたまは苦しうに泡を立てはじめる。七八月の炎熱はかうして平原の到るところの街々に激しい流行病（はやりやまい）を仲介し、日ごとに夕焼の赤い反射を浴びせかけるのである。

この時、海に最も近い沖ノ端の漁師原（れふしばら）には男も女も半裸体のまま紅い西瓜をむさぼり、石炭酸の強い異臭の中に昼は寝ね、夜は病魔退散のまじなひとして廃れた街の中、或は堀の柳のかげに BANKO（バンコ）（縁台）を持ち出しては盛んに花火を揚げる。さうして朽ちかかった家々のランプのかげから、死に瀕した虎刺拉（これら）患者は恐ろしさうに蒲団を匍ひだし〔#「匍ひだし」は底本では「匍ひいたし」〕、ただちつと薄あかりの中に色変へてゆく五色花火のしたたりに疲れた瞳を集める。

焼酎の不摂生に人々の胃を犯すのもこの時である。犬殺しが歩るき、巫女（みこ）が酒倉に見えるのもこの時である。さうして雨乞の思ひ思ひに白粉をつけ、紅い隈どりを凝らした仮装行列の日に日に幾隊となく続いてゆくのもこの時である。さはいへまた久留米餅をつけ新しい手籠を擁（かか）へた菱の実売りの娘の、なつかしい「菱シヤンヲウ」の呼声をきくのもこの時である。

九月に入つて登記所の庭に黄色い鶏頭の花が咲くやうになつてもまだ虎刺拉（コレラ）は止む気色もない。若い町の弁護士が忙しさに粗末な硝子戸を出入りし、蒼白い葉種屋の娘の乱行の漸く人の噂に上るやうになれば秋はもう青い渋柿を搗く酒屋の杵の音にも新しい匂の爽かさを忍ばせる。

祇園会が了り秋もふけて、線香を乾かす家、からし油を搾る店、パラピン蠟燭を造る娘、提燈の絵を描く義太夫の師匠、ひとり飴形屋（飴形は飴の一種である、柳河特殊のもの）の二階に取り残された旅役者の女房、すべてがしんみりとした気分にも物の哀れを思ひ知る十月の末には、先づ秋祭の準備として柳河のあらゆる溝渠はあらゆる市民の手に依て、一旦水門の所を閉され、水は干され、魚は掬はれ、腥ぐさい水草は取り除かれ、溝（どぶ）どろは綺麗に浚ひ尽くされる。この「水落ち」の楽しさは町の子供の何にも代へ難い季節の華である。さうしてこの一騒ぎのあとから、また久濶（ひさし）ぶりに清らかな水は廃市に注ぎ入り、楽しい祭の前触が異様な道化の服装をして、喇叭を鳴らし拍子木を打ちつつ、明日の芝居の芸題を面白をかしく披露しながら町から町へと巡り歩く。

祭は町から町へ日を異にして準備される、さうして彼我的家庭を挙げて往来しては一夕の愉快なる団欒に美しい懇親の情を交すのである。加之、識る人も識らぬ人も酔うては無礼の風俗をかしく、朱欒（ざぼん）の実のかげに幼児と独楽（こま）を廻はし、戸ごとに酒をたづねては浮かれ歩く。祭のあとの寂しさはまた格別である。野は火のやうな樺紅葉に百舌がただ啼きしきるばかり、何処からともなく漂浪（さすら）うて来た傀儡師（くぐつまはし）の肩の上に、生白い華魁（おゐらん）の首が、カツクカツクと眉を振る物凄さも、何時の間にか人々の記憶から掻き消されるやうに消え失せて、寂しい寂しい冬が来る。

要するに柳河は廃市である。とある街の辻に古くから立つてゐる円筒状の黒い広告塔に、折々、西洋奇術の貼札が紅いへらへら踊の怪しい景気をつけるほかには、よし今のやうに、アセチリン瓦斯を点け、新たに電気燈（でんき）をひいて見たところで、格別、これはという変化も凡ての沈滞から美しい手品を見せるやうに容易く蘇らせる事は不可能であらう。ただ偶々（たま／＼）に東京がへりの若い歯科医がその窓の障子に気まぐれな赤い硝子を入れただけのことで、何時しか屋根に薊の咲いた古い旅籠屋にはほんの商用向の旅人が殆ど泊つただけはひも見せないで立つて了ふ。ただ何時通つても白痴の久たんは青い手拭を被つたまま同じ風に同じ電信柱をかき抱き、ボンボン時計を修繕（なほ）す禿頭は硝子戸の中に俯向いたぎりチツクタツクと音をつまみ、本屋の主人（あるじ）は蒼白い顔をして空をただ凝視（みつ）めてゐる。かういふ何の物音もなく眠つた街に、住む人は因循で、ただ柔順（おとな）しく僅に Gonshan（ゴンシヤン）（良家の娘、方言）のあの情の深さうな、そして流暢な軟かみのある語韻の九州には珍しいほど京都風なのに阿蘭陀訛の熔（とろ）け込んだ夕暮のささやきばかりがなつかしい。風俗の淫（みだ）らなのにひきかへて遊女屋のひとつも残らず廃れたのは哀れふかい趣のひとつであるが、それも小さな平和な街の小さな世間体を恐るゝ——利発な心が卑怯にも人の目につき易い遊びから自然と身を退くに至つたのであらう。いまもなほ黒いダアリヤのかげから、かくれ遊びの三味線は昼もきこえて水はむかしのやうに流れてゆく。

沖ノ端

柳河を南に約半里ほど隔てて六騎（ロツキユ）の街沖ノ端がある。（六騎とはこの街に住む漁夫の渾名であつて、昔平家没落の砌に打ち洩らされの六騎がここへ落ちて来て初めて漁りに従事したといふ、而してその子孫が世々その業を継襲し、繁殖して今日の部落を為すに至つたのである。）畢竟は柳河の一部と見做すべきも、海に近いだけ凡ての習俗もより多く南国的な、怠惰けた規則（しまり）のない何となく投げやりなところがある。さうしてかの柳河のただ外面（うはべ）に取すまして廃れた面紗（おもぎぬ）のかげに淫らな秘密を匿してゐるのに比ぶれば、凡てが露（あらは）で、元気で、また華やかである。かの巡礼の行楽、虎列拉避けの花火、さては古めかしい水祭りの行事などおほかたこの街特殊のものであつて、張のつよい言葉つきも淫らに、ことにこの街のわかい六騎は温ければ漁（すなど）り、風の吹く日は

遊び、雨には寝（い）ね、空腹（ひもじ）くなれば食ひ、酒をのみては月琴を弾き、夜はただ女を抱くといふ風である。かうして宗教を遊樂に結びつけ、遊樂のなかに微かに一味の哀感を繋いでゐる。観世音は永久（とこしへ）にうらわかい町の処女に依て斎（いつ）がれ（各の町に一体づつの観世音を祭る、物日にはそれぞれある店の一部を借りて開帳し、これに待つくわかい娘たちは参詣の人にくろ豆を配り、或は小屋をかけていろいろの催をする。さうしてこの中の資格は処女に限られ、縁づいたものは籍を除かれ、新しい妙齡（としごろ）のものが代つて入る。）天火（てんび）のふる祭の晩の神前に幾つとなくかかぐる牡丹に唐獅子の大提灯は、またわかい六騎の逞しい日に焼けた腕（かひな）に献げられ、霜月親鸞上人の御正忌となれば七日七夜の法要に寺々の鐘鳴りわたり、朝の御講に詣づるとては、わかい男女夜明まへの街の溝石をからころと踏み鳴らしながら、御正忌参（めえ）らんかん……………の淫らな小歌に浮かれて嬉曳（あひびき）の楽しさを仏のまへに祈るのである。

沖の端の写真を見る人は柳、梅檀、石榴、櫨などのかげに、而も街の真中を人工的水路の、水もひたひたと白く光つては芍薬の根を洗ひ洗濯女の手には波紋を画く夏の真昼の光景に一種のある異国的情緒の微漾を感じずであらう。あの水祭はここで催され藍玉の俵を載せ、或は葡萄色の酒袋を香（にほひ）の滴るばかり積みかさねた小舟は毎日ここを上下する。正面の白壁はわが叔父の新宅であつて、高い酒倉は葺の上部を現はすのみ。かうして、私の母家はこの水の右折して、終に二条の大きな樋に極まり、渦を巻いて鹹川に落ちてゆくその袂から、是に左したところにある。

今は銀行となつたが、もとはやはり姻戚の阿波の藍玉屋の生鼠（なまこ）壁の隣に越太夫といふ義太夫の師匠が何時も気軽な肩肌ぬぎの婆さんと差向ひで、大きな大きな提燈を張り代へながら、極彩色で牡丹に唐獅子や、桜のちらしなどをよく描いてゐた藁葺きの小店と、それと相對して同じ様な生鼠壁の旧家が二つ並んでゐる。何れも魚問屋で右が醤油を造り、左が酒を造つた。その酒屋の、私は Tonka（トンカ） John（ジョン）（大きい坊ちゃん、弟と比較していふ、阿蘭陀訛か。）である。して、隣は矢張り祖父時代に岐れた北原の分家で、後には醤油醸造を止した。

南町の私の家を差覗く人は、薊や蒲生英（たんぽぽ）の生えた旧い土蔵づくりの朽ちかゝつた屋根の下に、渋い店格子を透いて、銘酒を満たした五つの朱塗の樽と、同じ色の櫛のいくつかに目を留めるであらう。さうしてその上の梁の一つに紺色の可憐な燕の雛が懐かしさうに、牡丹いろの頬をちらりと巢の外に見せて、ついついと鳴いてゐる日もあつた。土間は広く、店全幅（いつぱい）の薬種屋式の硝子戸棚には曇つた山葵（わさび）色の紙が張つてあつて、其中ほどの柱に阿蘭陀渡の古い掛時計が、まだ正確に、その扉の絵の、眼の青い、そして胸の白い女の横顔のうへに、チクタクと秒刻の優しい歩みを続けてゐた。その戸棚を開けると、緑礬、硝石、甘草、肉桂〔#「肉桂」は底本では「肉柱」〕、薄荷、どくだみの葉、中には売薬の版木等がしんみりと交錯（こんがら）がつた一種異様の臭を放つ。それはある漂流者がここに來て食客をしてゐた時分密かに町の人に薬を売つてゐたのが、逝（な）くなつたので、そのまゝにしてあるといふ、旧い話であらう。

庭には無論朱欒（ザボン）の老木が十月となれば何時も黄色い大きな実をつけた。その後の高い穀倉に秋は日ごとに赤い夕陽を照りつけ、小流を隔てゝ十戸ばかりの並倉に夏の酒は湿つて悲しみ、温かい春の日のぺんぺん草の上に樋匠（をけはな）は長閑に樋を鳴らし、赤裸々（あかはだか）の酒屋男は雪のふる臘月にも酒の仕込みに走り廻り、さうして町の水路から樋をくぐつて来るかの小さい流は隠居屋の涼み台の下を流れ、泉水に分れ注ぎ、酒樋を洗ひ真白な米を流す水となり、同じ屋敷内の猪水に落ち、ガメノシユブタケ（藻の一種）の毛根を幽かに顫はせ、然るのち、ちゆうまえんだの菜園を一周回（めぐり）して貧しい六騎（ロツキュ）の厨裏に濁つた澱みをつくるのであつた。そのちゆうまえんだはもと古い僧院の跡だといふ深い竹藪であつたのを、私の七八歳のころ、父が他から買い求めて、竹藪を拓き野菜をつくり、柑子を植ゑ、西洋草花を培養した。それでもなほ屋は赤い鬼百合の咲く畑に夜は幽霊の生じろい火が燃えた。

世間ではこの旧家を屋号通りに「油屋」と呼び、或は「古問屋（ふつどいや）」と称へた。実際私の生家は此六騎街中の一二の家柄であるばかりでなく、酒造家としても最も石数高く魚類の問屋としては九州地方の老舗として夙に知られてゐたのである。従て浜に出ると平戸、五島、薩摩、天草、長崎等の船が無塩、塩魚、鯨、南瓜（ボウブラ）、西瓜、たまには鷺鳥、七面鳥の類まで積んで来て、絶えず取引してゐたものだつた。さうして魚市場の閑な折々は、血のついた腥くさい石鰯（いしだゝみ）の上で、旅興行の手品師が囃子おもしろく、咽喉を真赤に開けては、激しい夕焼の中で、よく大きな雁首の煙管を管いつぱいに呑んで見せたものである。

私はかういふ雰囲気の中で何時も可なり贅沢な気分のもとに所謂油屋の Tonka（トンカ） John（ジョン）として安らかに生ひ立つたのである。

南関

私の第二の故郷は肥後の南関（なんくわん）であつた。南関は柳河より東五里、筑後境の物静かな山中の小市街である。その街の近郊外目（ほかめ）の山あひに恰も小さな城のやうな何時も夕日の反照をうけて、たまたま旧道をゆく人の胆仰の的となつた天守造りの真白な三層楼があつた。それが母の生れた家であつて、数代この近郷の尊敬と素朴な農人の信望とをあつめた石井家の邸宅であつた。

私もまたこの小さな国の老侯のやうに敬はれ、侍（かしづ）かれ、慕はれて、余生を読書三昧に耽つた外祖業隆（なりたか）翁の真白な長髯の家で生れて——明治十八年一月二十五日——然る後古めかしい黒塗の駕籠に乗つて、まだ若い母上と柳河に帰つた。

私は生れて極めて虚弱な児であつた。さうして癩癧の強い、ほんの僅かな外気に当るか、冷たい指さきに触（さは）られても、直ぐ四十度近くの高熱を喚び起した程、危険極まる児であつた。石井家では私を柳河の「びいどろ鱈」と綽名した位、殆んど壊れ物に触るやうな心持で恐れて誰もえう抱けなかつたさうである。それで彼此往来するにしても俥からでなしに、わざわざ古めかしい女駕籠（をんなのりもの）を仕立てたほど和蘭の舶来品扱ひにされた。それでもある時なぞは着いてすぐ玄関に昇ぎ据ゑた駕籠の、扉をあけて手から手へ渡されたばかりでもう蒼くなつて痙攣（ひきつ）けて了つたさうである。

三歳の時、私は劇しい瘧扶欺（チブス）に罷つた。さうして朱欒（サボン）の花の白くちるかげから通つてゆく葬列を見て私は初めて乳母の死を知つた。彼女は私の身熱のあまりに高かつたため何時しか病を伝染（うつ）されて、私の身代りに死んだのである。私の彼女に於ける、記憶は別にこれといふものもない。ただ母上のふところから伸びあがつて白い柩を眺めた時その時が初めのまた終りであつた。

家に来た乳母はおいそと云つた。私はよく彼女（かれ）と外目（ほかめ）の母の家に行つては何時も長々と滞留した。さうして迎への人力車がその銀の輪をキラキラさして遙かの山すその岡の赤い曼珠沙華のかげから寝ころんで見た小さな視界のひとすじ道を懷しさうに音をたてて軋つて来るまで、私たちは山にゆき谷にゆき、さうしてただ夢の様に何ものかを探し廻つて、もう馴つこになつて珍らしくもない自分たちの瀉くさい海の方へ歸らうと思はなんだ。

かういふ次第で私は小さい時から山のにほひに親しむことが出来た。私はその山の中で初めて松脂のにほひを臭ぎ、ゐもりの赤い腹を知つた。さうして玉虫と斑猫（はんめう）と毒茸と……いろいろの草木、昆虫、禽獣から放散する特殊のかをりを凡て驚異の触感を以つて嗅いで廻つた。かゝる場合に私の五官はいかにも新しい喜びに

顫へたであらう。それは恰度薄い紗（きれ）に冷たいアルコールを浸して身体の一部を拭いたあとのやうに山の空気は常に爽やかな幼年時代の官感を刺戟せずには措かなかつた。

南関の春祭はまた六騎の街に育つた羅漫的（ロマンチック）な幼児をして山に対する好奇心を煽てるに充分であつた。私は祭見物の前後に顫へながらどんぐりの実のお池の水に落つる音をきき、それからわかい叔母の乳くびを何となく手で触つた。

柳河風俗詩 目次

- 柳河
- 櫨の實
- 立秋
- 水路
- 酒の黴 一から二十五（略）
- 酒の精
- 紺屋のおろく
- 沈丁花
- N O S K A I
- かきつばた
- A I Y A Nの歌
- 曼珠沙華
- 牡丹
- 氣まぐれ
- 道ゆき
- 目くばせ
- あひびき
- 水門の水は
- 六騎
- 梅雨の晴れ間
- 菰の葉
- 旅役者
- ふるさと

柳河風俗詩 本文

柳河

もうし、もうし、柳河（やながは）じや、
柳河じや。
銅（かね）の鳥居を見やしやんせ。
欄干橋（らんかんばし）をみやしやんせ。
（馭者は喇叭の音（ね）をやめて、
赤い夕日に手をかざす。）

薊の生えた
その家は、……………
その家は、
舊（ふる）いむかしの遊女屋（ノスカイヤ）。
人も住はぬ遊女屋（ノスカイヤ）。

裏の BANKO [# 著者註の「＊」が欠字] にゐる人は、……………
あれは隣の繼娘（ままむすめ）。
繼娘（ままむすめ）。

水に映（うつ）つたそのかげは、……………
そのかげは
母の形見（かたみ）の小手鞠（こてまり）を、

小手鞠を、
赤い毛糸でくくるのじや、
涙片手にくくるのじや。

もうし、もうし、旅のひと、
旅のひと。
あれ、あの三味をきかしやんせ。
鳩（にほ）の浮くのを見やしやんせ。
（馭者は喇叭の音をたてて、
赤い夕日の街（まち）に入る。）

夕焼（ゆうやけ）、小焼（こやけ）、
明日（あした）天気になあれ。
＊緑臺、葡萄牙語の轉化か。

櫨の實

冬の日が灰いろの市街を染めた、――
めづらしい黄（きい）ろさで、あかるく。
濁川に、向ふ河岸（かし）の櫨（はじ）の實に、
そのかげの朱印を押した材木の置場に。

枯れ枯れになつた葦（あし）の葉のささやき、……………
潮の引く方へおとなしく家鴨（あひる）がすべり、
鰻を生けた魚籠（うけ）のにほひも澱（とろ）む。

古風な中二階の危ふさ、
欄干（てすり）のそばに赤い果（み）の萬年青（おもと）を置いて、
柳河のしをらしい縫針（ぬひはり）の娘が
物指（ものさし）を頬にあてて考へてる。

何處（どこ）かで三味線の懶（ものう）い調子、――
疲れてゆく静かな思ひ出の街（まち）、
その裏（うら）の寂しい生活（くらし）をさしのぞくやうに
「出（いで）の橋」の朽ちかかつた橋桁（はしげた）のうへから
YORANBANSHO 〔#「YORANBANSHO」に「＊」の著者註〕の花嫁が耻かしさうに眺め
てゆく。

久し振りに雪のふりさうな空合（そらあひ）から
氣まぐれな夕日がまたあかるくてりかへし、
櫨（はじ）の實の卵いろに光る梢、
をりをり黒い鴉が留まっては消えてゆく。

＊ 嫁入のあくる日盛装したる花嫁綿帽をかぶりて先に立ち、澁
き紋服の姑つきそひて、町内及近親の家庭を披露してあるく、風俗
花やかなれども匂いと古く雅びやかなり。

立秋

柳河のたつたひとつの公園に
秋が來た。
古い懷月樓（くわいげつろう）の三階へ
きりきりと繰（く）り上ぐる氷水の硝子杯（コップ）、
薄茶（うすちや）に、雪に、しらたま、
紅（あか）い雪洞（ぼんぼり）も消えさうに。

柳河のたつたひとつの遊女屋（いうぢよや）に
薊（あざみ）が生え、
住む人もないがらんどうの三階から
きりきりと繰り下ぐる氷水の硝子杯（コップ）、

お代りに、ラムネに、サイホン、
こほろぎも欄干（らんかん）に。

柳河のたつたひとりの NOSKA! 〔#「NOSKA!」に「*」の著者註〕は
しよんぼりと、
月の出の橋の擬寶珠（ぎぼしゆ）に手を凭（もた）せ、
きりきりと音（おと）のかなしい薄あかり、
けふもなほ水のながれに身を映（うつ）す。

「氷、氷、氷、氷……………」
* 遊女、方言。

水路

ほうつほうつと螢が飛ぶ……………
しとやかな柳河の水路（すゐろ）を、
定紋（じやうもん）つけた古い提灯が、ほんやりと、
その舟の芝居もどりの家族（かぞく）を眠らす。

ほうつほうつと螢が飛ぶ……………
あるかない月の夜に鳴く蟲のこゑ、
向ひあつた白壁の薄あかりに、
何かしら燐のやうなおそれがむせぶ。

ほうつほうつと螢が飛ぶ……………
草のにほひする低い土橋（どばし）を、
いくつか棹（し）をかがめて通りすぎ、
ひそひそと話してる町の方へ。

ほうつほうつと螢が飛ぶ……………

とある家のひたひたと光る汲水場（クミツ）に
ほんのり立つた女の素肌
何を見てゐるのか、ふけた夜のところに。

酒の精

『酒倉に入るなかれ、奥ふかく入るなかれ、弟よ、
そこには怖ろしき酒の精のひそめば。』
『兄上よ、そは小さき魔物（まもの）ならめ、かの赤き三角帽の
西洋のお伽譚（とぎばなし）によく聞ける、おもしろき……………。』
『そは知らじ、然れどもかのわかき下婢（アイヤン）にすら
母上は妄（みだ）りにゆくを許したまはず。』
『そは訝（いぶ）かしきかな、兄上、倉の内には
力強き男らのあまたゐれば恐ろしき筈なし。』
『げにさなり、然れども弟よ、母上は
かのわかき下婢（アイヤン）にすらされどなほゆるしたまはず。
酒倉に入るなかれ、奥ふかく入るなかれ、弟よ。』

紺屋のおろく

にくいあん畜生は紺屋（かうや）のおろく、
猫を擁（かか）えて夕日の濱を
知らぬ顔して、しやなしやなど。

にくいあん畜生は筑前しぼり、
華奢（きやしや）な指さき濃青（こあを）に染（そ）めて、
金（きん）の指輪もちらちらと。

にくいあん畜生が薄情（はくじやう）な眼つき、
黒の前掛（まえかけ）、毛繻子か、セルか、

博多帶しめ、からころと。

にくいあん畜生と、擁（かか）えた猫と、

赤い入日にふとつまされて

瀉（がた）に陥（はま）つて死ねばよい。ホンニ、ホンニ、……………

沈丁花

からりはたはた織る機（はた）は

佛蘭西機（ふらんすばた）か、高機（たかはた）か、

ふつととだえたその窓に

守宮（やもり）吸ひつき、日は赤し、

明（あか）り障子の沈丁花。

NOSKAI

堀の BANKO をかたよせて

なにをおもふぞ。花あやめ

かをるゆふべに、しんなりと

ひとり出て見る、花あやめ。

かきつばた

柳河の

古きながれのかきつばた、

晝は ONGO 〔#「ONGO」に「*」の著者註〕の手にかをり、

夜は菱（しを）れて

三味線の

細い吐息（といき）に泣きあかす。

（鴉（ケエツグリ）のあたまに火が點（つ）いた、

潜（す）んだと思ふたらちよいと消えた。）

* 良家の娘、柳河語

AIYAN 〔#「AIYAN」に「*」の著者註〕の歌

いぢらしや、

ちゅうまえんだ〔#「ちゅうまえんだ」に傍点〕のゆふぐれに

蜘蛛（コブ）が疲（つか）れて身进行くす、

ほんに薊の紫に

刺（とげ）が光るぢやないかいな。

（* ANTEREGAN の畜生はふたごころ。わしやひとすぢに。）

1、下婢、兒守女、柳河語。

2、あの畜生？

曼珠沙華

GONSHAN. GONSHAN. 何處（どこ）へゆく、

赤い、御墓（おはか）の曼珠沙華（ひがんばんな）、

曼珠沙華（ひがんばんな）、

けふも手折りに來たわいな。

GONSHAN. GONSHAN. 何本（なんぼん）か、

地には七本、血のやうに、

血のやうに、

ちやうど、あの兒の年の數（かず）。

GONSHAN. GONSHAN. 氣をつけな、

ひとつ摘（つ）んでも、日は眞晝、

日は眞晝、

ひとつあとからまたひらく。

GONSHAN. GONSHAN. 何故（なし）泣くろ、
何時（いつ）まで取っても曼珠沙華（ひがんばんな）、
曼珠沙華、
恐（こは）や、赤しや、まだ七つ。

牡丹

ほんにの、薄情（はくじやう）な牡丹がちりかかる。
風もない日に、のう、
紅（あか）い牡丹が、のうもし、ちりかかる。
ひらきつくした二人（ふたり）がなかか、
雨もふらいで、のうもし、ちりかかる。

氣まぐれ

逢ひに來たち〔#「ち」に「*」の著者註〕の
日の照り雨のふるなかを、
Odan mo iya, Tinco Sa!

しやりむり別れたそのあとで、
未練（みれん）な牡丹がまたひらく。
Odan mo iya, Tinco Sa!

- 1、ちの〔#「ちの」に傍点〕は雅言のとや〔#「とや」に傍点〕なり。來たの、來たんですつて。柳河語。
- 2、Odan はわたしなり、Tinco Sa は感嘆詞なり、全體の意味はあら厭だよ、まあ。同上。

道ゆき

鰯（ぼら）と黒鯛（ちんのいを）と、
黒鯛（ちんのいを）と、
鰯と、のうえ〔#「のうえ」は小さい文字〕
肥前山をば、やんさのほい〔#「やんさのほい」は小さい文字〕、けさ越えた、ばいとこずいずい〔#「ばいとこずいずい」は小さい文字〕。

後家（ごけ）と、按摩（あんま）さんと、
按摩さんと、
後家と、のうえ〔#「のうえ」は小さい文字〕
蜜柑畑から、やんさのほい〔#「やんさのほい」は小さい文字〕、昨夜（よべ）逃げた、ばいとこずいずい〔#「ばいとこずいずい」は小さい文字〕。

目くばせ

門づけのみふし〔#「みふし」に「*」の著者註〕語（がた）りがいうことに
高麗烏（かうげがらす）のあのこゑわいな。
晝の日なかに生れた赤子
埋（う）めた和尚が一人（ひとり）あるぞえ。

古寺の高麗烏（かうげがらす）のいふことに、
みふし〔#「みふし」に傍点〕語（がた）りのあの絃（いと）わいな。
今日（けふ）も今日とて、かんしやくもちの
振（ふ）られ男がそこいらに。

* 鄙びた粗末なる一種の琵琶を抱きて卑近なる物語を歌ひながらゆく盲目の門づけなり、地方特殊のものにてその歌ひものをみふし〔#「みふし」に傍点〕と云ふ。

あひびき

きつねのてうちん〔#「きつねのてうちん」に「*」の著者註〕見つけた、
蘇鐵のかげの黒土（くろつち）に、
黄いろなてうちん見つけた、
晝も晝なかおどおどと、
男かへしたそのあとで、
お池のふちの黒土に、
きつねのてうちん見つけた。
* 毒茸の一種、方言、色赤く黄し。

水門の水は

水門（すみもん）の水は
兒をとろとろと渦をまく。
酒屋男は
半切（はんぎり）鳴らそと權を取る。
さても、けふ日のわがころ
りんきせうとてひとり寝る。

六騎

御正忌（しやうき）〔#「御正忌」に「*」の著者註〕參詣（めえ）らんかん、
情人（ヤネ）が髪結ふて待（ま）つとるばん。

御正忌參詣（めえ）らんかん、
寺の夜（よ）あけの細道（ほそみち）に。

鐘が鳴る、鐘が鳴る。
逢うて泣けとの鐘が鳴る。

* 親鸞上人の御正忌なり。

梅雨の晴れ間

※（まは）せ、※（まは）せ、水ぐるま、
けふの午（ひる）から忠信（ただのぶ）が隈（くま）どり紅（あか）いしやつ面
（つら）に
足どりかろく、手もかろく
狐六法（きつねろつぽふ）踏みゆかむ花道の下、水ぐるま……………

※（まは）せ、※せ、水ぐるま、
雨に濡れたる古むしろ、圓天井のその屋根に、
青い空透き、日の光、
七寶（しつぽう）のごときらきらと、化粧部屋（けしやうべや）にも笑ふなり。

※（まは）せ、※せ、水ぐるま、
梅雨（つゆ）の晴れ間（ま）の一日（いちにち）を、せめて楽しく浮かれよと
※り舞臺も滑（すべ）るなり、
水を汲み出せ、そのしたの葱の畑（はたけ）のたまり水。

※（まは）せ、※せ、水ぐるま、
だんだら幕の黒と赤、すこしかかけてなつかしく
旅の女形（おやま）もさし覗く、
水を汲み出せ、平土間（ひらどま）の、田舎芝居の菰畑（にらばたけ）。

※（まは）せ、※せ、水ぐるま、
はやも午（ひる）から忠信（ただのぶ）が紅隈（べにくま）とったしやつ面（つ
ら）に
足どりかろく、手もかろく、
狐六法（きつねろつぽふ）踏みゆかむ花道の下、水ぐるま……………

菰の葉

芝居小屋の土間のむしろに、
いらいら沁みるものあり。
畑（はたけ）の土のにほひか、
昨日（きのふ）の雨のしめりか。
あかあかと阿波の鳴門の巡禮が
泣けば……………ころべば……………菰（にら）の葉が……………

芝居小屋の土間のむしろに、
ちんちろりと鳴いづる。
廉（やす）おしろひのにほひか、
けふの入り日の顫へか、
あかあかと、母のお弓がチヨボにのり
泣けば……………なげけば……………蟲の音が……………

芝居小屋の土間のむしろに
何時しか沁みて芽に出（づ）る
まだありなしの菰の葉。

旅役者

けふがわかれか、のうえ、
春もをはりか、のうえ、
旅の、さいさい、窓から
芝居小屋を見れば、

よその畑（はたけ）に、のうえ、
麥の畑（はたけ）に、のうえ、
ひとり、さいさい、からしの

花がちる、しよんがいな。

ふるさと

人もいや、親もいや、
小（ちい）さな街（まち）が憎うて、
夜（よ）ふけに家を出たけれど、
せんすべなしや、霧ふり、
月さし、壁のしろさに
こほろぎがすだくよ、
堀（ほり）の水がなげくよ、
爪（つま）さき薄く、さみしく、
ほのかに、みちをいそげば、
いまだ寢（ね）ぬ戸の隙（ひま）より
灯（ひ）もさし、菱（ひし）の芽生（めばえ）に、
なつかし、沁みて消え入る
油搾木（あぶらしめぎ）のしめり香（が）。

柳川に関する映画

柳川堀割物語 1987 年作品

文化記録映画

毎日映画コンクール文化記録映画賞受賞

製作：宮崎 駿 脚本・監督：高畑 勲

テーマ 音 楽 ： 間宮 芳生



福岡県柳川市。無数の小川を有した都市である。市民の多くは、柳川市の誇りは堀割であると答える。映画「柳川堀割物語」は、市民の誇りであり全国的にも有名な観光名所である柳川が、辿ってきた過程を示している。柳川が直面した問題は、全国の都市や町村でも遅かれ早かれ直面した問題である。柳川はどう対応したのか。何を選択したのか。それをこの映画は追っている。全国的に平野部都市部の小川が死の川と変貌したのは、昭和45年、公害問題のピーク時と重なる。その対策をほとんどの都市は下水道に求めた。柳川でも下水道に求めようとした。しかし、柳川には独自の水の歴史があった。「もたせ」。「もたせ」とは、雨や上流からの水をできるだけ滞留させて利用しつつ、雨が堀の能力を越えたと緩やかに田を浸すしくみをいう。「もたせ」こそ水利と治水の一体システムであった。「もたせ」の思想を維持するか、環境問題を合理的に解決するか、柳川は選択を迫られた。死に瀕した川は、回復不可能なまでに汚濁している。かつての管理組織が消滅し、清掃されず放置されたも同然の有様で、川は選択を待っている。「物語」は選択によって生まれた。柳川は「もたせ」の思想を選び、3つの実施計画を決めた。第1、浚渫によって水路を復元し流水を確保する。第2、排水規制を強め浄化施設を増やし汚水の流入を抑える。第3、維持管理体制をつくり市民参加の清掃を復活する。川とのつきあいはわずらわしかった。だから、一度こわれた連帯感を取り戻すのは難しい。それを乗り越え、実施計画を推進した行政の行動は、わが国では希有である。水路だけでなく、市民の潜在的なエネルギーを掘り起こした「物語」である。

廃市

福永武彦 原作、大林宣彦 監督、小林聡美 主演（1983 年）

小林聡美が15歳で映画デビューした「転校生」の一年後撮られた作品。卒業論文を書くために静かな環境を求め”寂れた町”柳川を訪れた学生（演：山下規介）が、旅館姉妹（妹が小林聡美、姉が根岸季衣）、姉の夫（演：峰岸徹）、その情婦（演：入江若菜）らの複雑な人間関係を垣間見る物語。



東京日和

カメラマンの島津と、その妻ヨーコ。繊細であるがゆえに、時にエキセントリックな行動に走りがちなヨーコに翻弄されながらも、島津は彼女を愛し続けていく。写真家・荒木経惟のフォトエッセイを原作に、異能の才人・竹中直人が監督・主演したノスタルジックなヒューマン・ドラマ。東京の裏路地といった日常的場所を魅力的にとらえる撮影、また夫婦の住む部屋など、細部にまでこだわりきった美術や小道具、ささいな日常の音もにがさない録音、初めて映画音楽を担当する大貫妙子のささやかなメロディと音色の妙など、優れたスタッフワークにも支えられ、これが3本目の監督となった竹中演出も冴えわたる。ヨーコ役の中山美穂が、これまでにない大人の女性を熱演し、新境地を開拓しているのも特筆すべき点だろう。